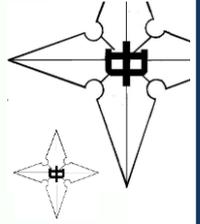
	<h1>南浦和中だより</h1>	
〒336-0026 さいたま市南区辻 6-1-33	TEL 048(863)0753	
FAX 048(836)1589 さわやか相談室直通	TEL 048(837)5909	

## 『はじまりはいつも雨』

校長 おお こうち のり かず 大河内 範一



雨の季節になると時々思い出す、私が中学2年生の頃の話である。担任のM先生は、子育て真っ最中の女性で、通勤の際は幼い男児2人を自転車の前後に乗せて送り迎えをしていた。「学校の帰りは、これにネギや大根などが入った買い物袋が増えるからたいへんなのよ」と、和やかな雰囲気雑談をしてくれるM先生が私は大好きだった。ただ時々、腰だったか足だったか、体調不良になって学校を休むことがあり、クラスのみんながとても心配していた。

七夕の頃、どこからか採ってきた立派な竹が教室内に設置され、短冊(たんざく)に生徒それぞれが「願い事」を書くことになった。私は野球部に所属していたのだが、あの頃は休日がまったくなく、長い時間活動していた時代だったので、雨天による部活動中止が何よりの楽しみだった。そこで、短冊には無記名で『雨降り』と一言だけ書いて、一人で満足していた。

M先生のお休みがまた続いた時、代わりに教室に来た副担任の先生が、竹に飾られた短冊をひとしきり眺めた後、ちょっと不満気な顔で「M先生は、天気が悪いと体が痛むみたいなのよね。雨が降ることを願っている人がいるから、なかなかよくなるんじゃないの?」という話をした。私は少し顔を伏せ気味にして、前席の友達の背中にさりげなく隠れた。確かにM先生の体調のことはまったく考えずに、自分のちっぽけな願いをおもしろがって書いていただけだった。「もう少し他の人の気持ちや状況を考えながら、言葉を選んでしっかり書くべきだった」とちょっと反省していた。

別の日、その副担任の先生から声を掛けられた。「雨降り短冊」の真犯人を知ってか知らずか、「この前、M先生にね、『学校を休む日が多くてクラスが心配でしょ?』と話したらね、『うちは学級委員の大河内くんたちや、クラスを守ろうとしてくれる生徒がたくさんいるから安心なのよ』と言っていたわよ。これからも頼むわね!」と微笑んでくれた。私は一気に顔が赤くなったのを感じた。そして、M先生がそんなふうに分人たちのことを思ってくれていたのかと胸が熱くなった。遠い昔の日常生活の一場面なのだが、この心が震えた出来事が、そしてM先生との出逢いが、「将来は教員になりたい」という自分の夢を後押ししてくれたのだと思う。これが私の教員人生のはじまりだったのかもしれない。世の中、何が自分の人生を左右するかわからないので、私たちはその瞬間(とき)その瞬間を大切にしていかなければならないと痛感する。

中学校を卒業してもう40年以上になるのだが、M先生とは今でも年賀状のやり取りを続けている。現在は、かなりの高齢になられたが、孫たちに囲まれて穏やかな生活を送っているとのこと。もし何かの機会で、短冊を書くことがあったら、『雨降り』などとは決して書かずに、心を込めて『天晴れ(あっぱれ)』と書きますね!